外れスキル持ちの天才錬金術師

hazure skill mochi no tensai renkinjutsushi

神獣に気に入られたのでレア素材探しの旅に出かけます

4

著 蒼井美紗 Misa Aoi

ill. 丈ゆきみ Yukimi Take

CHARACTERS



ローズ
エリクたちが街で
偶然出会った少女。
何者かに追われている。

リルン
鋭い爪の攻撃と風魔法が
得意なフェンリル。
実はツンデレ。

スーちゃん
鑑定と空中歩行の
能力を持つ神獣。強気で
高飛車。好物は魚。

デュラ爺
異空間魔法が使える神獣。
物知りでみんなの
お爺ちゃん的存在。

ラト
木の実が大好物な
食いしん坊の神獣。
いつも元気でおしゃべり。

フィーネ
神獣を呼び出せるスキル
「神獣召喚」を持つ。
エリクをパーティーに誘う。

エリク
本作の主人公。触れた素材が
変化する特殊なスキル
「素材変質」を持つ。
そのせいで錬金工房をクビになり、
冒険者として生きることに。

プロローグ

採取後の素材に触れると全てを劣化させてしまうが、採取前の素材に触れれば上位の素材に変質するという厄介なスキル――素材変質を得た俺は、神獣召喚スキルを持つフィーネと四人の神獣たちとともに、冒険者として旅をしていた。

スキルをコントロールできるようになるためのアイテム、スキル封じの石を錬金するために素材を集めているのだが、星屑石と朱鉄、水晶華、純黒玉の四つはすでに手に入り、残りはあと一つ、神木の葉だ。

デルダード王国では国の救世主となり、さらに冒険者ギルドでは問答無用のAランク昇格となってしまった俺たちは、目立ちすぎて居心地が悪くなった国を出て、神木の葉がある神山に向けて出発することにした。昇格時にギルドで二つの依頼を受けたので、それを達成しつつ目的地に向かう予定だ。

国境で引き止められるのではないかという懸念は杞憂だったようで、無事にデルダード王国を出た俺たちは、キルバ王国という国に来ていた。内陸方面に進んだので海に面していない国で、スーちゃんは少しだけ残念そうである。

『エリク、次に海に行けるのはいつかしら』
「神木が内陸にあるからな……」
神山があるのは海から離れた場所なのだ。無事に神木の葉を手に入れることができたら、そこからスキル封じの石の錬金となる。
無事に錬金が成功するとして、そこからまた海沿いの国を目指すことを考えると――。
「数ヶ月は先になるかも。でもその間に川魚があれば食べたり、広い湖があったら寄ろうか」
「そうだね。内陸にも美味しい魚はいるよね」
フィーネもそう言って、スーちゃんはさっきまでよりも楽しそうな表情になった。
『分かったわ』
『広い湖はいいな。船はあるか？』
リルンはやっぱり船に魅入られているらしい。
「大きな湖ならあるんじゃないか？　でも木造の小さな船だと思うけどな」
『それでも構わん。一流の船乗りはどんな船も乗りこなすのだ』
どこでそんな言葉を覚えたのだろうか。すでに船乗りの自覚が芽生え始めているリルンに、俺もフィーネも苦笑を浮かべてしまった。
そんな中で、ラトが元気良く告げる。
『僕は内陸好きだよ！　たくさん木の実があるからね！』

『わしはどちらでも構わんが、美味いものがある場所がいいな』
デュラ爺の意見には俺も賛成だった。
それからも皆で盛り上がりながら街道を歩いていると、目の前に目的の街が見えてきた。
デルダード王国から一番近いキルバ王国の街までは乗合馬車一本で行けたのだが、その街は国境近くの小さな街だったので、俺たちは直接キルバ王国の王都を目指したのだ。
ただキルバ王国は国土が狭く、王都までいくつかの街を経由して徒歩でも行けるという話を聞き、今回は乗合馬車を使わなかった。
皆が途中の森に寄りたがるからという理由もあったが、大きな理由としては俺やフィーネのレベルアップだ。最近は鍛錬の時間をしっかり取れていなかったので、久しぶりに森で魔物と戦って、俺たちは実力の向上に努めた。
「王都に着いたらゆっくり休みたいな」
実力は上がったけど、さすがに疲れたので思わずそう呟くと、フィーネが同意する。
「うん。少なくとも数日は王都を観光しつつのんびりしようか。そのあとは今後の予定を決めないとね」
「そうだな」
キルバ王国に来た理由はデルダード王国と接していたからと、小さい国ながら多数の国と接して

いて、王都からならどの国に行くにも便利そうだからだ。特にキルバ王国自体に目的があるわけではない。

ただせっかく来たんだからキルバ王国を楽しみたいし、あとは――。

「キルバ王国でもいくつか依頼を受けよう」

「うん、私もそう思ってた。結局ここまでの街ではギルドに寄らなかったもんね」

「Aランクって、ありがたいけどちょっとギルドから遠のくよな」

どう考えてもギルドに行けば騒ぎになることが確実なので、長期滞在しない街ではギルドに寄らなくてもいいかという気持ちになるのだ。

特に俺たちは、全くお金に困っていないから。

「分かる。王都にしばらく滞在するなら、顔を出しておこうね。また何か依頼をお願いされるかもしれないし」

「あり得るな。できる範囲で受けよう」

Aランクとしてギルドに貢献する意志はあるのだ。そうしておいた方が、何かあった時に助けてもらえる。

『ん？　何やらパンの匂いがしてきたぞ！』

街にかなり近づいたところでリルンが叫んだ。

まだ街の外なのに匂いを感じられるとか、どれだけ鼻がいいのだろうか。それとも、パンの匂いだけは感じられるとか。

「ふふっ、パンもまた買おうね」

『うむ！』

『パンも街や国によって少し違うものな』

『そうなのだ！』

デュラ爺の言葉に、リルンが珍しく強めに同意した。

『ここまでの街で食べたパンからすると、この国は歯応えがしっかりとしたパンが多い。我はどんなパンも好きだが、硬めのパンはバリバリとした食感が好きだ』

『わしも歯応えのあるパンは好きじゃ』

珍しく二人が意気投合している中、街の入り口である外門の外にいくつかの屋台があるのが見えた。

街に入るための列に並んでいる人たち向けに、商売をしているらしい。

「あの屋台でパンを売ってるのかもな」

「そうみたいだね」

人の出入りがかなり多い街なのか、王都とはいえ外門の外でも屋台が開かれているのは割と珍しい。

さすがのリルンでも、壁で隔たれた街中のパンの匂いは感じられないか。なんて考えていると、

屋台をキラキラとした眼差しで見つめるリルンが言った。
『むっ、すぐに買いに行くぞ！』
「はいはい。並びながら買うから」
「リルン、一人で行っちゃダメだよ」
リルンが一人だけ向こうに行ったら、魔物の襲撃だと大騒ぎになることは確実だ。フィーネの静止に、リルンはなんとか走るのをやめてくれた。
しかしよっぽど屋台に行きたいのか、そわそわうずうずしている。どれだけパンが好きなんだと俺が噴き出すのを耐えていると、スーちゃんも鼻をクンクンと動かした。
デュラ爺の背中に乗って、少し嬉しそうにしている。
『魚の香りもするわ』
「本当か？」
『私を疑うの？　確実にこれは魚よ。フライかしら』
スーちゃんにジロッと睨まれてしまい、俺は慌てて両手を横に振った。
「いや、そんなことはない。もしかしたら魚のフライをパンに挟んで売ってるのかもしれないな」
「それは美味しそうだね」
『木の実も入ってるかな！』
「いや、木の実はどうかな～」

皆で会話を楽しみながら街に近づくと、屋台はかなり繁盛しているようだ。
結局、屋台で食べ物を買ってから街に入る審査の列に並ぼうということになり、まずは屋台へと足を進めた。
数人が並んでいる後ろから屋台を確認すると、予想通り魚のフライをサンドしたパンを売っている。塩漬けの野菜と辛味のあるソースもたくさんかけてもらえるみたいだ。さらにパン自体にもスパイスが練り込まれているのか、色が黄色っぽい。
「キルバ王国らしい食べ物だね」
「うん。特にスパイスが」
キルバ王国はスパイス料理の文化がかなり浸透していて、今まで寄ってきたどの街でも大量にスパイスを売る露店があったり、多様なスパイス料理があったのだ。
俺はこのスパイス料理がかなり気に入っている。今までも結構スパイスを買い込んだが、王都でも買う予定だ。
長期で保つらしいし、いろんな料理にかけて食べたい。
『我は三つ食べるぞ！』
『わしは二つじゃな』
『私も二つにするわ』
『僕は……美味しそうだったら、エリクのをちょっともらってもいい？』

悩んだ末のラトに問いかけられ、俺はつい頬を緩めながら頷いた。
「もちろん」
「じゃあ、全部で九個かな」
少し待つと俺たちの順番になり、大量注文に喜ばれつつ、店主のおじさんが手際よくサンドパンを作るのを眺めた。ソースは溢れ落ちそうなほどかけてくれるみたいだ。
こんなにかけたら辛すぎないかと思っていると、次々とかけられるソースに目を見張っていたフィーネが呟いた。
「凄いですね」
その言葉を聞いて、おじさんは「へへっ」と自慢げに笑う。
「うちの料理はこのソースが肝だからな。たっぷりかけた方が美味いんだ。辛さより旨みが強いから安心してくれ」
「美味しそうです」
「だろ？　気に入ったらまた買いに来てくれよな。ソースだけの持ち帰りもできるからよ」
「はい。気に入ったらまた寄りますね」
「ははっ、ありがとな。まずは食べてみてくれや」
そんなやり取りをしているうちに九個のサンドパンができあがり、俺とフィーネで手分けして抱え持った。

「まいどあり！」
元気なおじさんに見送られて、街に入る審査の列の最後尾に向かう。待ちきれない様子のリルンたちに急かされて、さっそく食事開始だ。
「はい。リルンが三つな。デュラ爺とスーちゃんは二つだ」
衆人環視の中で異空間から台や皿を出すわけにはいかないので、俺とフィーネでパンを持って、直接皆に食べさせることにした。
ガツガツと食べ進めているが、たっぷりのソースで口の周りが汚れている。特にリルンは白い毛並みなので汚れがひどく目立っていた。
口の周りが汚れているだけで一気に強そうな魔物から食いしん坊に見えるのが面白くて、笑いそうになってしまう。リルンに睨まれそうなので必死に我慢して、腹筋を震わせながら俺もパンを口にした。
全てを一度に口に入れるために、大口でかぶりつく。
「んっ」
「ん！　美味しいね」
パリッと焼かれた硬めのパンを噛みちぎると、中にはサクサク食感のフライがある。フライの身は淡白だが、ふわふわしていて甘さもあり最高に美味い。
塩漬け野菜のしんなりとした食感も楽しく、メインの味付けであるガツンとした旨味のあるソー

スが口いっぱいに広がった。
スパイスではあるので辛さはあるが、店主の言う通り辛すぎない味付けみたいだ。これならたっぷりかけても、辛くて食べられないということはない。
「これは美味いな」
「うん。確かにソースがたっぷりかかってた方が美味しいと思う」
「分かる」
パンが硬めでしっかりしていて水分量が少ないタイプなので、ソースが多いことでパンがより美味しくなっている。
もしかしたらそれを見越して、パンを硬めに焼いているのかもしれない。
「パンに練り込まれたスパイスも好きだ」
「私も。結構感じるよね。辛いっていうより、ちょっと香りが変わってる感じかな」
「うん。その香りがより美味しさを引き立ててるな」
ただ、何よりもこのソースが美味い。魚のフライだけじゃなくて肉にかけても合うだろうし、茹でた豆に和えても絶対に美味いだろう。
店主の言う通り、ソースだけ買いたくなるほどの味だ。
「このパンはまた買いに来るとして、ソースも買いたいね」
相当気に入ったのか、フィーネの中でリピートが確定したらしい。



「ここに滞在してるうちに買いに来よう」
『次は十個買うぞ！』
俺たちの会話を聞いていたらしいリルンが、口をもごもごさせながら言った。
『わしもこれは好きじゃな』
『もっと食べたいわ！　この魚って川魚かしら、湖かしら。ソースとも合っているわね』
神獣たちも気に入ったようだ。特にリルンの尻尾がブンブンと揺れている。買い込んだスパイスでこのソースを再現できたらいいけど、何が入ってるんだろうか。
刻まれたいくつかの野菜にミンチ肉も入っている気がする。あとはスパイスの種類がよく分からないな……。
そんなことを考えながら食べ進めていると、俺の肩にいたラトに頬をぺたっと触られた。
『エリク、僕も食べてみる』
頬を触ってきたラトは、俺の肩からサンドパンを覗き込みながら言った。
木の実じゃないのであまり乗り気ではなく、俺のを少しもらおうかなと控えめに言っていたラトも、美味しさに興奮している皆のことを見て味が気になったようだ。
「了解」
ラトはカリカリとした食感が好きなので、端の方の特に硬めのパンと、フライの端のサクサク感が強いところを千切ってあげた。

さらにそこにソースをたっぷりとつけて、ラトに手渡す。
「溢さないように気をつけて」
『うん！』
両手で持ってパンを口に運んだラトが、もぐもぐと咀嚼して飲み込むと、すぐにもう一口を食べ始めたのが、見なくともなんとなく分かった。
木の実を食べた時ほどの嬉しそうな様子はないが、食べる手を止めないので普通に気に入ったらしい。ラトが木の実以外で気に入る料理は少ないので、その姿だけでこのパンの美味しさが分かるというものだ。
『美味しいね』
「もっと食べるならあるけど、どうする？」
『うーん、あと少しだけ食べる！　カリカリしてるところがいいな』
「よし、俺が厳選しよう」
特にカリカリしていそうなところをまた手渡すと、ラトはおかわりも美味しそうに食べた。しかし食べ終えたところで、思わず苦笑してしまうことを口にした。
『もっとカリカリしてたらさ、もっと美味しくなりそうだよね～』
ラトにはやっぱり歯応えが足りないらしい。ただパンもフライもこれ以上カリカリにしたら、それはカリカリというより焦げになるだろう。

「そうじゃなくて、ソースに木の実を入れたらいいんじゃ……」
味付けの感じからして、このソースは木の実にも合うと思うのだ。ソース自体を木の実にかけてもいいだろうし、ソースに木の実を混ぜても美味しいと思う。
何気なく告げた俺の言葉に、ラトは一気にテンションが上がったらしい。
『エリク！　それ食べたい！』
肩の上で騒がれるとラトの大きさでも体が大きく揺れてしまう。俺はラトを捕まえ、ちょうど食べ終えたところだったデュラ爺の背中に移動させた。
ラトは尻尾をピンッと立てて、期待の眼差しを向けている。
「とりあえず……さっきの屋台でソースを買ったら、それを木の実につけて食べようか」
『うん！　楽しみ～！』
今度はデュラ爺の背中の上ではしゃぐラトがとても可愛い。俺はラトに癒されながら、またサンドパンを口に運んだ。

それからは列が進むごとに俺たちも少しずつ移動しながらパンを堪能し、全員が食べ終わった頃には番まであと少しだった。
『むぅぅぅ、もっと食べたいぞ』
まだ食べ足りないリルンがさっきから不満げだ。しかし街中にはまた別のお店があるだろうし、今日のところは追加購入はしないと決めた。
「また明日か明後日ぐらいに来ような」
「そうだよリルン。少し我慢した方がもっと美味しく感じられるかも」
『我はいつでも美味しく食べられるぞ』
食いしん坊の主張を聞きつつも列は進み、ついに俺たちの番になる。
「身分証を」
門にいた兵士はリルンたちに驚きや警戒の眼差しを向けながらも、他の人たちと同じように対応してくれた。
そこで俺とフィーネは、さりげなく冒険者ギルドカードを提示する。
「……なっ」
Aランクという表示に、兵士はこれでもかと目を見開いた。しかし、大きな声は出さずに耐えている。
今までの街でも、兵士は割と俺たちの冒険者ランクを知っても騒がずにいてくれたのだ。職務に忠実で真面目な人が多いのだろう。さらに街の出入り口である門は、貴族など高い身分の人も通る場所だから、普通じゃない身分証に慣れているというのもあるのだと思う。
「さすがに、Aランクは初めて見たな」
「そうなのですね。確かに俺たちも他のAランクの人に会ったことはないです」

冒険者はあまり他人と馴れ合わないというのもあるが、ギルドに行ってAランクがいたなどの話も聞いたことはない。
「ここまで上がれるのは本当に一握りだからな……凄いな」
しみじみと呟いた兵士は、俺とフィーネを交互に見つめる。
「やはり、凄い者は周りにそうと思わせないのか」
小声で呟いた。
本当に強い人ならなんとも思わないセリフだろうが、実際に俺個人は強くないので微妙な気持ちになってしまう。
俺ももっと鍛錬すれば、そのうち見た目でAランクだと納得してもらえるのだろうか。
――凄く難しい気がするのは気のせいだと思いたい。
ガタイを良くする方法を考えていると、兵士が気を取り直した様子で紙とペンを手にして、神獣たちの方に視線を向けた。
「街に入る従魔は一応登録しなければいけないんだ。名前と能力を教えて欲しい」
「分かりました。四人とも私の従魔なのですが、この子はリルンと言って、風魔法と爪での攻撃が得意です。次の子は――」
フィーネの説明を全てメモした兵士は、それだけで神獣たちが街中に入るのを許可してくれた。
Aランクに昇格する前よりも街に入るのは楽になった。やはり信頼度が高いのだろう。

「従魔たちが人に危害を加えたり物を壊したりしたら、それは主人の責任になる。そこだけは気をつけてくれ」
「もちろんです」
「じゃあ通っていい。街のためにぜひよろしく頼む」
「はい。ありがとうございました」
そうして騒ぎになることなく、むしろスムーズに街に入ることができた。皆で門を抜けて街に足を踏み入れると――。
「おお」
「賑やかな街だね」
目の前には門前広場があり、多種多様な屋台が立ち並んでいた。
キルバ王国の王都だ。

第一章　キルバ王国の王都と観光

キルバ王国の王都、門前広場には屋台が立ち並んでおり、その先には大通りが見えた。大通りにもたくさんのお店があるようだ。とても賑わっている。

パッと見た限り統一感のある街並みというよりも、雑多な文化が入り交じっているような雰囲気で、カラフルなお店やシックな雰囲気のお店、昔ながらの歴史を感じさせる外観のお店、最新のおしゃれなカフェなど様々な種類の店が混在していた。

『楽しそうな街ではないか。パンの匂いがそこかしこからするぞ！』

『これはいいな。しばらく滞在したい街じゃ』

『美しくはないけれど、楽しそうではあるわ』

『美味しい木の実はあるかな！』

皆は楽しそうだ。

『まずはあちらの店に行くぞっ』

『ちょっとリルン、私は向こうがいいわ。魚の匂いがするのよ』

『わしはどちらでもいいが、美味い肉料理が欲しいぞ』

『僕は木の実！』

楽しそうなのはいいが、少し暴走気味である。俺は勝手に近くの屋台に向かおうとしているリルンを、ガシッと胴体を掴む形で止めた。

「リルン待て。皆もちょっと落ち着いて」

「この街にはしばらくいるから、そんなに急がなくても大丈夫だよ」

「まずはこの後どうするか方針を決めよう」

今の時間は夕方の少し前ぐらいだ。

この街では冒険者ギルドに顔を出す予定だし、早めに宿を取るか一軒家を借りるかして、滞在場所を確保する必要がある。

どっちを先にするかが問題だ。

『む、屋台巡りではないのか？』

「それはやることをやってからな。せっかく街に着いたのに野宿なんて嫌だぞ」

『……それはそうだが』

リルンの勢いが弱まったところで、俺はフィーネに視線を向けた。

「どうする？　先に冒険者ギルドに顔を出せば、いい物件とか貸不動産屋を紹介してもらえるかなって考えてるんだけど」

「私もそう思うよ。でも問題はギルドに行くと騒ぎになったり、そうはならなくてもギルドマス

ターと顔を合わせることになって色々と依頼を紹介されたりして、忙しくなっちゃうことだよね」
苦笑を浮かべながら言ったフィーネに完全に同意だ。それが嫌で、今までの街ではギルドを避けていたのだから。
でもさすがにそろそろ顔を出した方がいいし、ギルドに行った方が便利なのは確かだ。
特にこの街にはしばらく滞在する予定だし、ここからまた別の国や街に行く道順や手段も相談したい。
「ちょっと観光して、のんびりしてからギルドに顔を出す形にする……？」
フィーネの意見を意識した提案をすると、少し悩んだフィーネは結局首を横に振った。
「やっぱり後回しにすると嫌になりそうだし、ギルドには行っちゃおうか。特にこの街は入り組んでそうだから、貸不動産屋を見つけるのも大変だよね」
「分かった。じゃあまずはギルドに行って、相談しつつ滞在場所を探そう。依頼を紹介されたら、少し休んでからって伝える方針で」
「うん。そうしよう」
俺とフィーネは意外と断れない性格なので押し切られることは多いのだが、これからはAランクとして色々と頼まれるだろうから、断る練習も大切だ。
「じゃあ皆、まずは冒険者ギルドに行くよ」
フィーネがそう伝えると、皆のテンションが一気に下がったのが分かる。それに笑いそうになりながら、俺も口を開いた。
「今日の夜ご飯はここの屋台の食べ歩きにするか」
『本当か！』
しょんぼりしていたリルンが一気に元気になった。
他の皆もパァッと明るい雰囲気に変わる。
「それまではギルドと宿探しに付き合ってね」
『うむ、仕方がないな』
『夜ご飯まで少し待とう』
『楽しみは取っておくべきって言うものね』
『僕、待てるよ！』
皆が賛同したところで、さっそく冒険者ギルド探しだ。
とはいえ、広場の向こう側にある五階建てぐらいの大きな建物に、デカデカと冒険者ギルドのマークがついている。この街のギルドはいい立地だ。
「あそこだな」
「だね」
一瞬で発見できたギルドに向けて、屋台に後ろ髪を引かれながら広場を横断した。

広いギルドだったのでリルンとデュラ爺も一緒に入ることができて、中に入った瞬間に大勢の視線が集まった。明らかに強そうな従魔がいれば当然だろう。

さらに受付の若くて小柄な女性が、俺たちを三度見ぐらいしてガタッと立ち上がった。

「あっ、あの！　エリクさんとフィーネさんでしょうか！」

なぜ名前を知っているのかと少し慄(おのの)きながら、二人で頷く。すると女性は安心した様子で頬を緩め、足早にカウンターから出てきた。

「突然お声がけしてしまって申し訳ございません。お二人がいらしたらギルドマスターに連絡するようにと言われておりまして、上に報告しても構いませんでしょうか。何かギルドに用事などはありますか？」

デルダード王国の冒険者ギルドマスターが、情報共有されるからどこの国でも相談や依頼達成報告をしてくれて構わないというようなことを言っていたけど、まさかここまで俺たちの情報が浸透しているとは予想外だ。

声をかけてギルドカードを見せれば、話が通じるぐらいだと思っていた。

Aランクの凄さを改めて実感しつつ、俺はフィーネと顔を見合わせる。

「別にいいよな？」

「うん。そこまで急ぎの用事があるわけじゃないもんね。あっ、でも今日から滞在できる場所を紹介して欲しくて。できれば一軒家などを」

フィーネが伝えると、女性はその要望にすぐに頷いた。

「かしこまりました。では皆さんがギルドマスターと話をしている間に、適した物件を選んでおきます。ご予算等はどうされますか？」

「えっと……法外に高いところじゃなければどこでも大丈夫です」

「この子たちが過ごしやすいところでお願いします」

「かしこまりました。ではこちらで少しだけお待ちください」

そう言った女性が足早にギルドの上層階に上がっていくのを見送ってから、俺はフィーネに視線を向けた。

フィーネもこちらを見たところだったようで、バチッと目が合う。

「なんか、凄いな」

「凄いね」

フィーネと完全に気持ちが一致している気がして、二人で笑い合った。

そんな間にも、ギルド内にいた他の人たちからの興味津々な視線は俺たちに突き刺さっていた。

聞こえてくる会話からすると、俺たちが何か特別な存在なのかと思いはしても、まさかAランクだとは思っていないようだ。

やはり俺とフィーネの見た目が問題なのだろう。

「でも、従魔たちは強そうだぜ？」

「そうだが、テイマーはあの二人のどっちかだろ？」
「確かにそうか。ただ、見たことのない従魔だよな……何か特殊な力があって強いとか」
「まあ、可能性はあるのか……？」
「ギルドに来ただけでギルドマスターに呼ばれるんだから、絶対に何かあるだろ」
様々な憶測が飛び交う中で、先ほどの女性がすぐに戻ってきた。
「お待たせいたしました」
案内されたのはギルドの二階にあるギルドマスターの執務室だ。
中に入ると応接セットを示される。俺たちはソファーに腰掛け、神獣たちはそれぞれ好きなところに寝そべった。リルンとデュラ爺は絨毯の上で、スーちゃんはフィーネ側のソファーの端、そしてラトは俺の膝の上を選んだ。
俺たちの位置が定まったのを確認してから、向かいのソファーにギルドマスターらしき男性が腰掛ける。そして先ほどの女性が、すぐにお茶を出してくれた。
「ありがとうございます」
ギルドマスターは、スキンヘッドで眼帯をしていて顔に大きめの傷がある、いかにも冒険者ギルドのマスターという風貌の人だった。
かなり強そうだが、表情は笑顔だ。
「お前たちがエリクとフィーネか。よく来たな！　従魔たちとも会えて嬉しいぞ！」

ガハハと笑いながら、ギルドマスターはさっそく話を始める。
見た目通りの豪快な人らしい。
「はい。あの……なぜ俺たちは呼ばれたんでしょうか？」
雰囲気的にかしこまる必要はないかと思ってラフに問いかけると、ギルドマスターは満面の笑みで手にしていた依頼票をテーブルに置いた。
「決まってるだろ？　Aランクのお前たちに受けて欲しい依頼がたくさんあるんだ！　いや～、この国に入ったって聞いた時から、早くここに来ないかと待ってたんだ。他の街のギルドには寄らなかったみたいだから、ここにも顔を出さないのかとヒヤヒヤしたが、来てくれて良かった。ありがとな！」
強面のギルドマスターにニカッと人懐こい笑みを向けられると、なんだか責める気分にもならない。難しい依頼を押し付けられそうなことには言いたいこともあるが……それはAランクだから仕方ないんだろう。
フィーネに視線を向けると、少し困ったような笑みを浮かべていた。
「あの、どんな依頼なんでしょうか。私たちはすでにAランクになってから二つの依頼を受けていて、そこまでたくさんは難しいんです。この国にも、これから向かう場所への中継地点として寄ったので……」
「おお、そうかそうか」

フィーネの説明に軽く頷いたギルドマスターは、依頼票をサーッと滑らせるようにスライドさせてテーブルに広げた。その枚数は全部で十枚だ。

「まあ、俺もこれを全部受けて欲しいとは言わないさ。ただ一つか二つは受けてくれるとありがたい。特にこっちの端から三つは頼める冒険者がほとんどいなくてな……ぜひどれか一つでも頼みたい！」

強制はされないようだが、ギルドマスターは広げた足の膝にそれぞれ手を置き、首を直角に曲げるような形で頭を下げた。

そうまでして頼まれると、俺たちとしては断りづらい。

ただ、別に依頼は受けるつもりだったからいいんだ。一つ二つなら問題ない。これから助けてもらうためにも、ギルドに貢献する意思はあるのだから。

あとはその依頼がどの程度の難易度かってことだ。ここまでAランクの俺たちを待ち望んでいて、すぐに頼む依頼となると面倒な予感しかしない。

とりあえず確認だけはしようと、まずは指定された右から三つの依頼を見てみると――。

「随分、大変そうな依頼だな」

「そうだね……」

フィーネとともに依頼票を覗き込んで、二人して難しい顔を浮かべてしまった。

とりあえず、三つのうちの二つは無理だ。

その一つは、海にいると言われている人魚の捜索。

人魚とは確か、下半身が魚で上半身が人間であるお伽話（とぎばなし）に出てくる存在だ。この国の貴族の一人が人魚にどうしても会いたいと、冒険者ギルドに依頼を出したらしい。

ただ、人魚なんているはずがない。

無駄に時間がかかる上に成果がなかったら依頼者から恨まれそうだ。一応期限が決まってるから、時間に余裕があれば海を堪能しているだけで莫大な報酬がもらえるいい依頼だと言えるのかもしれないが、これ以上のお金が必要ない俺たちは全く魅力を感じない。

「これは、すみません」

その依頼票を弾くと、ギルドマスターは手のひらを額にペチッと当てた。

「やっぱりそれは受けてもらえないか～。貴族様がAランク限定の依頼にしてるから、ずっと塩漬けなんだよな。こりゃあ、なんとか依頼の取り下げを検討してもらうべきかもしれねぇな」

ギルドマスターがぼやく中で、もう一つの依頼票も弾く。

「これも難しいです」

その依頼とは、幻のレインボーウルフの毛皮の納品だ。

こっちもレインボーウルフなんてものが本当に存在しているのか定かではないので、いつまでも達成できないことになってしまう。

ちなみにデュラ爺に何気なく依頼票を見せたが、首を横に振られた。これはただの伝説で、実際

には存在しないのだろう。
「それな～。やっぱりお前たちでも見たことないのか？」
「はい。どこにいるのかも全く分かりません」
「はぁぁ、そんな魔物いねぇんだろうなぁ」
疲れた表情になったギルドマスターには少し同情してしまう。この依頼を出しているのも貴族みたいなのだ。おそらく珍しいものを集めるのが趣味とか、虹色の毛皮で自分のマントを作りたいとか、そんな話なのだろう。
ギルドマスターに頑張ってくださいと心の中でエールを送りつつ、俺は最後の一枚を手にした。指定された三枚の中では、これが一番受けられる可能性が高い。
「ワイバーンの群れの討伐」
ワイバーンとは空を飛べる魔物で、ドラゴンほど脅威ではないが、実力のある冒険者パーティーがなんとか一匹を相手にできるぐらいの強さである。
大きな群れになると、街が滅びる可能性もあると聞いたことがあった。ずっと上空の安全圏にいて、そこから獲物の急所を的確に狙って滑空するらしく、気が抜けない上に攻撃を当てるのがとにかく大変らしい。
しかし、神獣たちなら倒せるかもしれない。
「鉱山に住み着いたとありますが、この鉱山はどこにあるんですか？」

フィーネが問いかけた。
「ここ、王都から馬車で二時間ほどの場所にある鉱山だ。ワイバーンが住み着いてからは閉鎖されてるが、かなり近いから、いつワイバーンが街を襲うのかと誰もが恐れている。ただあんまりにも群れの規模が大きくてな、Bランクの冒険者が二組も失敗して、さらに国の騎士団も討伐に失敗して、今は次の一手がない状況なんだ」
思っていたよりもヤバい状況じゃないか。俺は思わず言ってしまう。
「それ、このままだと街が大きな被害を受けるんじゃ」
ギルドマスターは険しい表情だ。
「そうなんだ……だから色々と話し合いはされてる。他国にいるAランク冒険者に依頼を出して来てもらうとか、なんとかワイバーンに毒を食べさせられないか……とかな。ただ、どの案もまだ進んでなくて――エリク、フィーネ、お前たちが討伐できるならばぜひ頼みたい！　どうかよろしく頼む！」
勢いよく、さっきよりも深く頭を下げられて、俺はフィーネと顔を見合わせた。
正直、こういう依頼は俺たちにとって積極的に受けたいタイプのものだ。断る理由はない。
討伐すべき敵が明確であり近い場所にいるのなら、すぐに達成してギルドへの貢献度も上げられるのだ。
唯一の懸念点は、神獣たちにワイバーンの群れが倒せるのかってことだけど……。

「皆、どうかな」
フィーネも俺と同じことを思ったようで、ギルドマスターに不審に思われないよう、神獣たちに向かって簡潔に問いかけた。
すると、まずはリルンが答える。
その顔には楽しげな笑みが浮かんでいた。
『ワイバーン討伐か？　楽しそうだからやってやろう。久しぶりに骨のある相手と戦えそうだ』
楽しそうというよりも獰猛な笑みのリルンを見ていると、ほんの少しだけワイバーンに同情の気持ちが湧いてくる。
とりあえず、討伐できるかどうかの心配はいらないらしい。
というか、少し前にポイズンドラゴンと戦ったばかりじゃないか。その前にはサラマンダーと戦ってるし、全然久しぶりではない。
『ワイバーンならば、いくらいてもわしらの脅威ではないじゃろう。すぐに討伐できる』
『僕も賛成！　ワイバーンって山にいるんでしょ？　途中で木の実の採取もしようね！』
『私も構わないわよ。ワイバーンって声が下品だから好きじゃないし、群れて鬱陶しいから早く倒しちゃいましょう』
街の脅威であるワイバーンへの認識がズレすぎている気がするが、そこは神獣だということでスルーした。

「あの、どのぐらいの群れなのかは分かっていますか？」
一応群れの規模も聞いておこうと問いかけると、ギルドマスターはソファーから立ち上がって、部屋の中にあった棚から別の資料を取り出した。
「これが調査結果だ。正確な数は分からず予想になるが、三十匹ほどの群れだと言われている」
それが多いのか少ないのか分からないので、リルンたちに視線を向ける。
『なんだ、そんなに少ないのか。百は欲しかったな。三十ではすぐに終わってしまう』
リルンは不満げに、鼻の頭に皺を寄せた。
『その程度ならばすぐに倒せそうじゃな』
『木の実の採取に時間がかけられるね！』
『下品な存在が多くなくて良かったわ』
三十という数はそこまで多くないようで安心し、その程度ならば問題はないから依頼を受ける。
そう口を開きかけた時。
「こんなに大きな群れは、この国の歴史で初めてなんだ」
ギルドマスターの続けた言葉に固まってしまった。
国の歴史で初めて……ということは、三十という数はとても多いということではないだろうか。
当たり前のことを脳内で考えていると、フィーネが質問した。
「あの、普通の群れって、どのぐらいなんでしょうか」

「そうだな……五匹から十匹ぐらいだろうか。どうだ？　やっぱりお前たちでも難しいか？」
五匹から十匹が普通。
神獣たちとは違いすぎる認識に、俺は内心で慌てながら浮かべようとしていた安堵の笑顔を全力で消し去って、神妙な顔を頑張って作り口を開いた。
「――いえ、三十は多いですが、俺たちなら討伐可能です。なので依頼を受けます」
「私たちなら、問題ないです」
少し引き攣った笑顔のフィーネも俺の言葉に重ね、なんとか常識外れな言動を避けながら依頼受注を伝えた。
ギルドマスターに俺たちの動揺は伝わっていないようで安堵する。
神獣たちの基準は普通とはかなりズレていることを、改めて心に刻んだ。皆はとても頼りになるけど、人間の常識は分からないのだ。俺たちはすでに相当目立っているが、これ以上は悪目立ちしたくないので、あまり常識外れなことはしない方がいい。
あくまでも普通の人間としてかなり強い、ぐらいにしなくては。
「う、受けてくれるのか……？」
俺が色々と考えていると、ギルドマスターが念押しするように確認した。
「はい。受けます」
もう一度伝えると、ギルドマスターの顔が喜色に染まる。バンッとテーブルに手を置いて、勢いよくこちら側に身を乗り出した。
「本当か!?」
「も、もちろんです」
かなりの勢いに驚いてしまう。
「ありがとな……！　お前たちはこの街の救世主だぜ！」
ギルドマスターは俺とフィーネの手を代わる代わる取って、激しく握手をしてきた。その興奮度合いから、ワイバーンの群れがどれほど悩みの種だったのか伝わってくる。
しかし、救世主か……。
「救世主はもう間に合ってるというか……」
ついそう言ってしまったが、ギルドマスターの耳には入っていないようだった。他の依頼はガバッと雑に掴んで仕舞い、さっそくワイバーン討伐の依頼受注手続きを進めている。
「これを受けてくれるんなら、他の依頼なんて全部後回しでなんの問題もない！　これだけで十分だ。本当にありがとな！」
相当な勢いで書類にサインなどを書き込んでいるギルドマスターに、俺とフィーネは苦笑を向けあった。
俺たちとしてもこの依頼だけでいいのなら楽なので、得意分野で貢献できて良かったと思おう。
救世主だとかそういうのは……もう仕方がないと思うしかない。あまり大事にならず、普通に依

頼を達成して終わることを祈っておくことにした。
とりあえず、この国の人たちが安心して日々を過ごせるように、ワイバーンはしっかりと討伐しよう。
それからもギルドマスターがワイバーン討伐の依頼受注を爆速で進めているのを眺めていると、ふと一つの疑問が思い浮かんだ。
「あの、いつ頃までに依頼を達成すればいいでしょうか」
早めがいいことは分かっているが、さすがに移動の疲れもあるし、街に来てすぐにまた仕事というのは避けたいのだ。
数日ぐらいは休みが欲しい。
そんな気持ちで返答を待っていたら、ギルドマスターは少し悩んでから言った。
「そうだな……数ヶ月以内には頼みたい。ちょうど季節的に今は湿度が高いから、ワイバーンが活発じゃない時期なんだ。人里を襲う可能性は低く、そこまで切羽詰まってるわけじゃない。ただ、空気がカラッとしてくると危険度が増すから、それまでには頼みたい」
数ヶ月、思っていたよりも猶予がある話だった。俺はホッとして体の力を抜く。
でもよく考えたらそうだろう。そうじゃなかったら、他国にいるAランク冒険者への依頼を検討とか、毒を使った討伐作戦の検討とか、悠長なことは言っていられないはずだ。するとフィーネが口を開く。

「それなら、ちょっと観光してからでも大丈夫でしょうか。少し休みたいなと思っていて、数日後に討伐に向かいます」
事前にそんな話をしていたので、フィーネは俺が思っていることをほぼそのまま伝えた。
ギルドマスターは迷うこともなく、ニカッと晴れやかに笑う。
「もちろんなんの問題もないぜ。むしろ数日後に討伐に向かってくれるなんて、こっちの想定としては最速だ。マジでお前らは最高だな！」
ギルドマスターの俺たちへの評価は急上昇中らしい。
数日の休息は気にもされていないようで、俺たちってもしかしたら忙しなく働きすぎなんじゃないか……なんて考えが頭をよぎった。
思い返してみれば街でのんびりした記憶はあまりない。休んでも数日で、すぐに街を出ているのだ。
ただその原因は、神獣たちが狩りに行きたい、森に行きたい、木の実を探しに行きたいなどとすぐに言い出すからで——俺は諦めた。
俺たちに街でのんびりは無理だ。それに数日ぐらいが一番飽きなくていいのかもしれない。
まあ、もう少しのんびり錬金する時間が欲しい気持ちはあるけどな。
「そうだ、討伐成功の暁には国からも礼があるだろう。考えとけよ。従魔たちもよろしく頼むぜ」
書類から顔を上げたギルドマスターの言葉に、皆は大喜びだ。

『最高級パンをもらえるということだな！』
『木の実！　たくさんの木の実！』
『美味しい川魚の料理がいいわ』
『珍しい肉などがもらえたら嬉しいな』
いつも通りすぎる皆の要望はひとまずスルーして、俺はどの程度の礼になるのか聞いてみた。
「それは俺たちが決められるようなものなのでしょうか」
「こういう場合は、何か欲しいものはあるかって聞かれることが多いんじゃねぇか？」
「相場とかは……？」
フィーネの問いかけに、ギルドマスターは考え込む。
「よく分からんが、数十年前に国を救うような活躍をしたAランク冒険者がいてな。その冒険者はこの街にデカい屋敷をもらったらしいぜ。もう本人はいないんだが、子供が屋敷を引き継いで騎士になって、貴族になってるとか」
屋敷、騎士、貴族。そういうのはもうお腹いっぱいだった。
「私たちはこれからも冒険を続けるので、屋敷のようなものは必要ないのですが……自由も欲しいですし」
「それなら武器とか宝石とか、あとは金とかでいいんじゃないか？　屋敷を建てられるぐらいの金をもらったら一生遊んで暮らせるな。羨ましいぜ」

正直お金も武器も宝石も同じくお腹いっぱいだが、屋敷をもらうよりはいいだろう。
「分かりました。ただ俺たちはあまりそういうのは必要ないので……従魔たちの好物をもらったりできれば十分なんです。依頼達成報酬もたくさんもらえますし」
さらっと要望を伝えてみると、ギルドマスターは不思議そうに首を傾げた。
「もらえるものは、もらっとけばいいんじゃねぇか？」
「いただいても使い道がないんです」
困ったように笑ったフィーネの言葉に、ギルドマスターは納得したように頷く。
「確かにそうか。お前たちぐらいになるといくらでも金は稼げるもんな。はぁぁ、やっぱり羨ましいぜ」
彼は依頼票に書かれた報酬をじっと見つめてから、窓の外をぼんやりと眺めた。
「それに比べて、俺の給料は――」
意外とギルドマスターの給料は高くないらしい。
なんと声をかけていいのか分からず気まずい沈黙が流れたが、少ししてからギルドマスター自ら変な空気を吹き飛ばしてくれた。
「まあ、お前たちの要望は伝えといてやるよ。自由がなくなるようなやつだったり、過度な報酬は必要ないってことだな。従魔たちの好物も教えといてくれ」
「ありがとうございます！」

「よろしくお願いします。お礼にギルドマスターに美味しいお肉でも贈りますね」
フィーネが笑顔で伝えた言葉に俺が何度も頷いていると、ギルドマスターは嬉しそうに破顔した。
「それは嬉しいな。うちは食べ盛りの子供が三人もいて大変なんだ」
「じゃあたくさんのお肉と、しばらく保存できる甘いおやつも贈ります」
子供が喜びそうなクッキーなどの焼き菓子がいいだろう。保存って点だと干し肉とか塩漬けの食べ物もいいかもしれない。スパイス系もしばらくは保つはずだ。
俺たちの気持ちを尊重してくれるギルドマスターへの感謝の気持ちが大きく、色々なものを贈りたくなってしまった。
「マジでありがとな。お前たちはAランクなのに謙虚だし驕りがないし、本当に凄いやつらだ。何かあったらいつでも相談しろよ。あと、うちの家内はドライフルーツ入りのカップケーキが好みだ」
こそっと付け足された言葉に、俺とフィーネは笑顔になる。
「カップケーキ、たくさん買っておきますね」
『カップケーキならば我も食べるぞ！』
パンに似た焼き菓子も好きなリルンが反応した。不自然にならない程度にリルンに向けて頷いていると、受注処理が終わったようだ。
「よし、これでお前たちはワイバーン討伐依頼を受注したことになる。よろしくな」

「はい。お任せください」
「街の脅威を排除してきます」
そうして話に区切りがついたところで、ギルドマスターが世間話のように問いかけてきた。
「そういえば、この国に寄ったのは中継地点って言ってたな。次はどこに行くんだ？」
「次はラハ王国に行きたいんです」
俺が答える。
ラハ王国とは、サンダーキャットの生息地だ。依頼を受けた時の目撃情報の場所とはかなり離れているが、デュラ爺曰く、たまに遠くまで狩りに行くのだろうという話だった。
生息地に一週間もいれば討伐できるそうだ。
「ラハ王国か。それなら乗合馬車が週に一本出てるな」
「本当ですか？　良かったです。ここで少し過ごして、落ち着いたら予約しようと思います」
次の国にも無事に行けることが分かって、俺たちは笑みを浮かべた。
「それなら予約しといてやるよ。確かラハ王国行きは三日後だから、次の馬車だとちょっと早いか。次の次ぐらいにしとくか？　あ、それともギルドで馬車を貸すこともできるぜ。お前たちはAランクだからな。そのぐらいの特別扱いは可能だ」
まさかそんなことまでしてもらえるなんて。俺とフィーネは顔を見合わせて頷き合い、馬車を貸してもらうことにした。

乗合馬車の出発日を気にしなくていいのはありがたい。
さらに乗合馬車だと途中で進路を変えたり森に寄ったりはできないが、俺たちだけで移動するならそれもできるのだ。
「御者は自分たちでやる形ですか？」
「いや、それもギルド員をつけられる」
ギルドの人がいると少し動きづらくはなるが、もうAランクだし、そこまで隠すようなこともない。伏せるべきなのは、俺たちのスキル関係のことと、神獣たちと話せることぐらいだ。森に入る時は馬車で待っていてもらえばいい。
色々と考えた末に、俺とフィーネは軽く頭を下げた。
「じゃあ、御者さんもよろしくお願いします」
「お願いします」
「よし、任せとけ」
ギルドマスターはニッと頼もしい笑みを浮かべた。
そこでちょうど部屋の扉がノックされて、最初に対応してくれた受付の女性が入ってくる。
「失礼いたします。皆様が滞在される一軒家の候補が二つありますので、お選びいただければと思い参りました」
女性が示したのは、どちらも居心地が良さそうな一軒家だった。ギルドが関わっている建物であり、この場で契約できるらしい。
「こちらの建物はギルドに近く、とても広い物件です。しかし庭があまり広くありません。もう一つはギルドからは少し離れますが街の中心地に近く、一軒目よりは狭い物件ですが従魔の皆さんでも余裕を持って中で寛ぐことができる程度の広さはあります。そして二軒目には広い庭がついています」
女性の説明を聞いて、俺の中でどちらにするかはすぐに決まった。
「どっちがいいと思う？」
「せーので指差してみようか」
フィーネの提案に頷き、俺たちはテーブルに載せられた二枚の紙に向き直る。
せーのっ！　と同時に指差した。
「あ」
「同じだね」
二人とも二軒目を選んでいた。二軒目の建物の広さでも皆が窮屈に思うことはなさそうだったので、そうなると広い庭に惹かれたのだ。
自然が好きな皆は庭にいることも多い。それに家の場所については、ギルドに近いよりもむしろ街の中心地に近い方が嬉しいのだ。次にギルドに来るとしたらワイバーンの討伐を終えた時くらいで、毎日来るわけではない。

「では、こちらの一軒家を契約する形でよろしいでしょうか」
「はい。よろしくお願いします」
「期限はどうされますか？　延長はギルドに仰っていただければすぐに可能です」
「では……ひとまず二週間でお願いします」
「かしこまりました」
俺たちとのやり取りを終えたところで、女性が書類に何かをサラサラッと書き込んだ。すぐにペンを差し出され、こちらがサインを書けば契約が完了する。
二週間分の賃料と交換する形で、家の鍵と家の場所が描かれた地図を受け取った。
「何かありましたら、いつでもギルドに仰ってください。キルバ王国をごゆっくりとお楽しみください」
「ありがとうございます」
家の契約も済んだところで、ギルドマスターが立ち上がった。
「よしっ、今日のところは終わりだな。時間を取ってもらって感謝する」
「こちらこそ色々とありがとうございました」
「この街にいる間はよろしくお願いします」
ギルドマスターと受付の女性に見送られて部屋を出て、階段を下る。俺たちが顔を出したところでまたギルド中の視線が集まるが、気にしないようにして通り過ぎた。

ギルドの外に出ると、新鮮な空気を大きく吸い込む。
「はぁぁ、やっぱり注目されるのは苦手だ」
「うーん！　空気が美味しいね」
フィーネも同じ気持ちのようで、大きく伸びをしていた。そんな俺たちに向けて、神獣たちが口々に言い始めた。
『やっと終わったか。待ちくたびれたぞ』
『長くかかったな』
『屋台巡りだよね！』
『お腹が空いてきたわ』
皆の言葉に完全に気が抜けて、俺は屋台が立ち並んでいる門前広場を指差す。
「よし、食べ歩きに行こう！」
『おー！』
『早く行くぞ！』
『まずは肉が良いな』
『魚を見つけましょう』
皆はノリノリだ。
フィーネも笑顔で皆の後に続き、俺たちは全員で屋台に向かった。

冒険者ギルドは門前広場沿いにあるので、屋台が立ち並ぶ場所はギルドを出てすぐだ。俺たちはさっそく端から屋台を見て回った。

冒険者ギルドや外門の近くだからか、冒険者らしい格好の人たちが多くおり、そのため屋台にはガッツリと食べられる肉料理が多いようだ。

「新鮮なボア肉の串焼き！　焼き立てだよー！」

「ラビットの肉はうちの屋台が一番だぜ。肉と濃いめに味付けした炒め野菜をパンに挟めば絶品だ！」

「たまには甘いものはどうだい？　甘く焼いた玉子串だよ～」

「スープならうちがおすすめだよ！　お好みでスパイスをかけられるからね～！」

客引きの声が次々と聞こえてきて、目移りしてしまう。

選択肢が多すぎて逆に選べない。

「どれも美味しそうだね」

「これだけあると迷うな。ただ俺は串焼きが……」

『わしも串焼きが食べたいぞ』

俺の言葉に被せるようにデュラ爺が言った。

「ははっ、了解。あの屋台の串焼きを買うか」

『私はその隣がいいわ。魚の塩焼きが食べたいの』

「じゃあ、俺はデュラ爺とスーちゃんと向こうに行こう。フィーネは……」

フィーネの食べたいものを聞く前に、リルンが言った。

『あそこにパン屋があるぞ！』

珍しく夜にパンだけを売ってるお店があるようだ。

『木の実のパンもあるかな！』

ラトもそちらに興味を惹かれたらしい。二人の言葉を聞いてから改めてフィーネに視線を向けると、楽しそうに笑っていた。

「私は二人とパンの屋台に行ってくるね。それから……そうだね。玉子串が気になるから買ってみようかな。エリクたちも食べたい？」

「うーん、一本お願い」

『わしも頼む』

「了解。二本追加ね。エリクは私の串焼きも一本お願い」

「もちろん」

そうして役割分担をしたところで、二手に分かれて屋台に向かうことになった。

俺はデュラ爺とスーちゃんを連れて、まずは串焼き屋だ。ちょうど焼き立てだったのですぐに購入できて、隣の魚を売っている屋台に向かう。

そこは川魚を綺麗に処理して、丸ごと塩焼きにしているようだった。じっくりと焼いた魚の身はふわふわで美味しいらしい。
「何本買う？」
『三本欲しいわ』
「じゃあ……五本で」
俺も食べたくなってしまい、フィーネも食べるかなと二本追加した。もし食べなければ、デュラ爺でも俺でも誰かが食べるだろう。
「はいよ！　焼けるまでちょっと待っててな。そこにベンチがあるから座っててくれ」
屋台前のベンチは焼き上がりを待つ人用らしい。ありがたく腰掛けて、待ち時間に串焼きを食べることにした。
「はいデュラ爺」
『うむ』
皿などを出すと邪魔なので、デュラ爺の前に串を差し出して食べてもらう形にする。俺も逆の手で串焼きを持って自分の口に運んだ。
「おお、美味いな」
味が濃い目で、肉は少し噛み応えがあるけど筋があるという感じではなく、肉自体の旨味が強い。おそらく少しだけ臭みがあるのだろうけど、それはタレの味で完全に消されていた。

立ち読みサンプル
はここまで

タレはスパイスがきいていて、香りとともに来る少しの辛味がとても美味しい。
「これ、いくらでも食べられそう」
『とても美味いな。追加したいぐらいじゃ』
全く同じ気持ちだが、屋台は他にもあるから悩ましいところだ。
そんなことを考えていると、パンと玉子串を持ったフィーネたちが戻ってきた。
「あ、フィーネ」
「エリク。買ってきたよ」
「ありがとう。こっちは今、魚が焼けるのを待ってるんだ」
「そうなんだ。じゃあ私たちも待ち時間で食べようかな」
それからリルンは焼き立てのパンを次々と、ラトは木の実のパンを、フィーネは串焼きと玉子串を、俺も玉子串を続けて食べて、魚が焼き上がるのを待った。
待ちきれなかったスーちゃんが串焼きの肉を少し食べていると、ついに声がかかる。
「待たせたな」
少し前から魚が焼けるいい匂いがしていたのだ。とても美味しそうである。
「はい、五本だ」
「ありがとうございます」
魚を受け取ると、さっそくスーちゃんに渡してあげた。食べやすいようにと皿の代わりになる紙